

あいらし 始良市 こころ 心をつなぐ物語 ものがたり

第1号

始良市で学ぶわたしたち。
始良市で育つわたしたち。
始良市で生きるわたしたち。
わたしたちは始良市で過ごす日々の中で
大切なことを学び、
そして、
もっと自分を伸ばして
みんなですばらしい未来をつくっていきます。

【小学校版】

- 1 さがしてみよう! 始良のじまん
「はっけん! あいらのじまん」 ★低学年向け
- 2 守り続けたい美しい風景があります。
「わたしたち山田のかかしづくり」 ★中学年向け
- 3 未来につなげたい, わたしが大好きなふるさとの伝統と文化
「大クスとともに」 ★高学年向け

物語を読んで・・・

◆ あなたの住んでいる地域には、どんな自慢がありますか。

みんなが知っている自慢。あなただけしか知らない自慢。自分の住んでいる地域を見つめてみると、いろいろな発見があります。自然のこと、行事のこと、人々のことなど、発見したらどんどん自分から触れ合ってみましょう。そうしたら、自分が住んでいる場所をもっともっと好きになりますよ。

◆ あなたの住んでいる地域には、どんな行事がありますか。

その行事には、どんな意味があるか調べてみましょう。そうすると「そんな大切な思いが込められていたんだ。」「ずっと昔からあったんだな。」と、行事のよさを感じることができるようでしょう。そして、参加するときのやる気もパワーアップします。あなたが参加してくれることで、ふるさとのみんなが喜んでいきます。

◆ あなたの住んでいる地域には、どんな歴史がありますか。

今、住んでいる地域がここにあるのは、これまで生きてきた人々の努力があったからです。そして、私たちはその最先端にいます。昔があって今がある。今は、昔の人の努力のおかげ。だからこそ、感謝の心でふるさとを大切にしたい。それは、わたしたちのためでもあり未来を生きる人のためでもあるのだから。

あなたが感じたこと・気付いたことをもとにして、自分に語りかけてみよう。
友達や先生と話し合ってみよう。
家族と、地域の方々と
いろんな人と触れ合ってみよう。



さがしてみよう! 始良のじまん

「ほっけん! 始良のじまん」

「こんな人があつまるとすてきな。」
きょうは、一年「ふれあいまつり」の日です。

ふれあいまつりは、始良市のゆうめいな食べ物や手作りのしなをしようかいます。おまつりです。

「きょうは、あご肉ステーキを食べような。」

お父さんが、うれしそうに言いました。ぼくは、あご肉ステーキを食べたことがあります。どんなりょう理でどんなあじがするのか食べてみました。

「ゆうすけ。あご肉ステーキの店は、あそこにあったぞ。」
お父さんが、ゆびをさしたお店には、どこよりも長い行列ができていました。

そのお店まで行こうとしたとき、お父さんが、人形をならべているお店の前で立ちどまりました。

「なつかしいなあ、ちょうさ人形。」

とつぶやきました。お父さんが手にもった人形は、白くてつるつるした、かわいい犬の人形でした。赤や青、黄色で色がぬられ、とてもきれいです。ぼくはお父さんに

「その人形は、なんなの。」

と聞きました。するとお父さんが、

「知らないのか。じいちゃんの家(いえ)のげんかんにもかざってあるだろう。これは、むかしから始良で作られている始良市のじまんの人形なんだよ。じいちゃんが、お父さんのせいちょうをねがって買ってくれたものなんだよ。ゆうすけにも買ってあげようね。」
と、えがおで話をしてくれました。

ぼくたちは、あご肉ステーキの店(みせ)にならんで、よひやく食べるんですよ。

「おまちとおさま。」

ころころとしたお肉は、とてもよいかおろがします。ぼくたちは、桜島と重富海岸が見えるベンチにすわりました。ぼくは、一口食べてみました。

「おいしー!」
思わず声が出ました。お父さんもぼくはく食べながら、

「始良のあご肉ステーキは、おいしいな。」
とうれしそうです。ぼくとお父さんは、二人で

「うまい、うまい」

となんども言いながら食べました。ぼくの横(よこ)にちやいとすわっていらるちやうさ人形も、ぼくの方(かた)を見て「じいちゃんも食べてください。」



あご肉ステーキは、始良市の新しいふるさとのりょう理です。

たくさんの人で にぎわう 始良のふれあいまつり



400年のれきしがある ちょうさ人形



あご肉ステーキ おいしいな。

始良市のイメージキャラクター「くすみん」



きみもさがしてみよう! 始良のじまん! 始良のじまん!

まも つづ うつく ふう けい 守り続けたい美しい風景があります。

「わたしたち山田のかかじゅく」

「へいじらじょうよ。」
「わたしは、ピエロがいい。」
「まあ、何でもいいんじゃない。」

わたしたちの住む山田地区で毎年行われる「かかじゅく」のきせつがやってきました。大人から子どもまで多くの人がさんかして、それぞれに工夫されたかかしがたくさん道路わきにならびます。わたしたちも、この行事にさんかすることを毎年とても楽しみにしています。わたしたちの学級で、今年はどうなかかしを作るのかという話し合いをしました。



ところが、いざ決めるとなるとみんなの意見がなかなかまとまりません。言い合いになったり、だまってしまったり、司会の友だちもちょっと困った顔をしています。とうとう話し合いの時間が終わってしまいました。

家に帰ってこのことをお母さんに話してみよう。

「それは、困ったわね…。そうだわ。かかし作りにくわしい人にだずねてみたらいっつか。何かアドバイスをくれるかも。」
と、わたしに言いました。

さっそく、次の日曜日、わたしは、毎年すてきなかかしを作っている近所のおじさんの家に、話を聞きに行きました。

「どんなかかしにするか、クラスで話し合ったのですが、なかなか決まらないんです。」
と話すとおじさんが、

「どんなかかしを作るかより、どんな思いをこめるかということが大事なんだよ。」

と話してくれました。わたしは、おじさんの言葉の意味がよく分かりませんでした。おじさんは、さらに続けます。

「今では、みんなが作ったかかしをかざって、にぎやかにお祭りが開かれるけど、かかしを作り始めたのは、ある問題がおこったことがきっかけなんだよ。」

「みんなが使う広場があるだろう。昔、あそこはごみを捨てる人が後をたたなかったんだ。そこで、町の人がちえを出し合って、かかしを作って、『ごみをすてないでほしい』とメッセージを送ればどうだろうか」というアイデアが生まれたんだ。」

わたしはよくその広場で遊びますが、たしかにゴミはありません。
「せつかく広場がきれいに使われるようになったのだから、かかしをこごだけにおいておくのはもったいないという思いがでてきてね。」
と話しながら、おじさんが山田の風景写真を見せてくれました。



次の話し合いの時、みんなにおじさんから聞いた話を伝えました。すると、クラスのみんなは顔を見合わせたり、だまって考えこんでいました。

それからそれぞれの意見を発表し始めました。私は、この間の話し合いとは少し変わってきたように感じました。

話し合いも終わりに近づいたとき、司会の友だちが明るい顔で言いました。

「わたしたちが作るかかしは、『山田を守る』『ロー』に決まりました。」
クラス中が大きな手につつまれました。



「この風景をいじたくはないという思いから、あちこじかかしがぶえたんだ。そして、たんねの人に山田の美しい風景をいっしょに見てもらいたいという思いをこめて、このかかしまつりは行われようんだよ。」

おじさんの話を聞いて、町の人たちのかかし祭りへの思いを、みんなに話したくなりました。



みらい だいす でんとう ぶんか
未来につなげたい、わたしが大好きなふるさとの伝統と文化

「大クスとともに」

ドン カカ ドン カカ ドン カカンカカンカカン
 蒲生八幡神社の境内にひびきわたる太鼓とカネの音。

八月二十一日、六年生になった大貴は、今年も蒲生八幡神社で太鼓おどりをおどっていた。ここにたどり着くまでに、一時間以上も太鼓をたたいてきた大貴は、もうへとへとになっていた。

「ああ、きついなあ。」と、うでの力がぬげそうになった時、境内を見下ろすように立っている日本一の大クスが、枝という枝を大きくゆすって、今年もまたあの風を送ってきた。この風を受けるとつかれがどこかへふきとんでいく。不思議な気持ちになりながら、大貴はまた太鼓をたたくうでに力をこめた。



太鼓おどりが終わると大クスの木の下で弁当を広げた。太鼓おどりの保存会の緑色のはっぴを着たじいちゃんも満面の笑顔だ。

「大貴、今年も大クス様はあの風を送ってくれたか。」

大クスのことをいつも「大クス様」と呼ぶじいちゃんに聞かれて、口いっぱいにおにぎりをほおばりながら大貴はうなずいた。

「そうか、それはよかった。大クス様は今年も元気じゃな。わしもわしの父ちゃんもあの風を受けて力をもらった。でもな、お前の父ちゃんが太鼓おどりをした時は大クス様が大変なことになっ

てな。あの風を送ってこなかったんじゃ。」

びっくりした大貴は、大クスを見上げながら語るじいちゃんの話に耳をかたむけた。「この町の人は、昔から大クス様とともに生きてきた。子どもたちは大クス様の周りで遊び、大人たちは木陰で仕事のつかれをいやしてきた。国の特別天然記念物になってからは、町の外からもたくさんの方が大クス様に会いに来るようになった。あまりの大きさに『すごい、すごい。』とおどろく人たちの声を聞くと自分たちがほめられているよううれしかったもんじゃ。」ふっと笑った後、じいちゃんは大きなため息をついた。そして、しばらくまってからまた語り始めた。

しかしな、来る人が多くなればなるほど、根回りの土がふみ固められて、大クス様はだんだん元気をなくしていった。何度も木の勢いを取りもどさせる工事をしたんじゃが、なかなか効果は上がらなかった。このころからじゃ、大クス様はあの風を送らんようになってしまった。

昭和六十年、大きな台風が直撃しよった。木陰を作っていた大枝が二十本以上も折れた。葉はほとんどふき飛ばされ、あまりにも痛ましい姿じゃった。

「大クス様を守らねば。」

町のみんなの気持ちは一つになった。そして動き始めたんじゃ。家々からむしろを持ち寄って大クス様の根元にしきつめ、土がかわくのを防いだ。寒さから守るために木の幹全体におおいかけた。消防団の人たちは毎日懸命に水をまき続けた。それでも元気が出ない。てつて的に調査した木のお医者さんが原因をつきとめた。実は大クス様の体の中はもうぼろぼろだったんじゃ。高さ十六段、広さ畳八枚分の穴ができていてあちこちくさっとした。直径四十センチにも広がる根は、大クス様を守るために造ったはずの石垣にじゃまされて、十分な水を吸えんようになってしまった。

「もしかすると、このまま。」

あきらめかける声が聞こえ始めたとき、大クス様を「国の宝」として守らねばならんと、国や県がいつしよに動いてくれることが決まった。数千万円に上る工事費用も国や県が協力して出してくれることになった。町のみんなが働きかけ続けた結果じゃと思つた。

「今度こそなんとか。」

みんな祈るように工事を見守った。大クス様にできた穴は、くさっている部分を取り除き内側から柱で補強された。石垣は取り払って土はすべて入れかえられた。再び根元がふみ固められないように、大クス様の周りに立派な木の遊歩道が造られた。大きな機械を使いながらも枝や根を傷つけないよう丁寧に工事をしてくれた。

平成十二年、大工事が終わった。そして八月二十一日、大クス様はわしとお前の父ちゃんに再びあの風を送ってきてくれた。その時はもう、涙があふれて、どうにも止まらんかった。

じいちゃんの話聞いた大貴は、しばらくたまって大クスを見つめた。

「よし、じいちゃん。また精いっぱい太鼓をたたきなよ。」

帯をぎゅっとしめなおし、境内の階段をかけ降りていく大貴。その小さい背中を見送るように、日本一の大クスが枝を大きくゆらしていた。



日本一の巨樹 蒲生の大クス

国の特別天然記念物

樹齢	1500年
樹高	30m
根回り	33.57m
幹周	24.22m

現在のクス



丁寧に進められた大工事



折れた大枝



昭和六十年 台風後の大クス